



「和歌山県防災ナビ」アプリ

災害発生時に的確に避難を行うための防災アプリです。避難に役立つ様々な機能を備えています。

和歌山県の公式アプリ **無料**でご利用いただけます!!
アプリのダウンロード・ご利用にかかる通信料は、利用者のご負担となります。



和歌山県防災ナビでできること!

- 避難先検索
- ルートナビ
- AR(拡張現実)の活用
- 防災情報通知
- 避難カードの共有
- 家族の居場所確認
- 避難トレーニング

現在地から近くの避難場所を簡単検索
 現在地から避難場所までのルートを表示
 避難場所などの方向を地図情報とカメラで表示
 事前の登録なしで防災情報をプッシュ通知
 家族で決めた緊急避難場所の情報を共有
 避難した家族の居場所を地図上で確認
 避難経路や要した時間を記録し確認



「世界津波の日」高校生サミット

将来を担う世界各国の高校生を対象に、地震津波などの災害から生命などを守ることができる次世代リーダーの育成を目的とした国際会議です。

2018年には、高知県と沖縄県の開催に引き続き、「稲むらの火」発祥の地である和歌山県で第3回サミットが開催されました。

参加者は、各学校における防災の取組を発表し、災害から世界中の人々の命を守るため、自分たちに何ができるのかを議論し、共に学び、「稲むらの火 継承宣言」を採択しました。

「稲むらの火 継承宣言」(一部抜粋)

1 災害について知識を得る

- 自然災害に対する備えができていないことが最も憂慮すべき問題であると考えました。
- 生徒全員が学べるよう、自然災害に関する学習を学校のカリキュラムに取り入れ、実践するというアイデアを共有しました。
- 地域住民全員と防災活動(避難訓練など)に取り組んでいきたいと思えます。

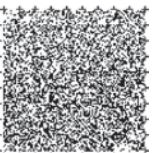
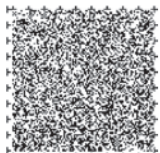
2 災害に備え意識を高める

- 災害は、地域ごとに異なる地理的特徴と関係があると考えました。
- 被災者の話を聞くことにより、災害に対する備えの重要性について人々の意識を高めるためのアイデアを共有しました。
- 防災情報の各種ツールについて学んだ上で、実際の避難時に人々の助けになるようなユニバーサルデザインの標識を設置する努力をしようと思えます。

3 災害から生き抜く

- 災害後の復旧・復興について、事前に計画を立てることが重要だと考えました。
- 災害発生前・災害発生時・災害発生後の助け合いの重要性について、認識を共有しました。
- 地域の年配者や専門家による講話またはハザードマップにより、自然災害のリスクを人々に伝え、災害時にパニックに陥らないよう明確なルールと計画を作成しようと思えます。

世界中の防災意識をさらに向上させていくため、私たち若い世代が濱口梧陵をはじめとする偉大な先人の志を継承し、このサミットにおいて学んだ「災害から命を守る」ためになすべきことを、それぞれの国において、私たち一人一人が実践していく決意をここに宣言します。



リサイクル適性(A)

11月5日

世界津波の日

Nov.5 World Tsunami Awareness Day



濱口 梧陵

©クニ・トシロウ
ケイ・タロー

「世界津波の日」

2015年(平成27年)12月の国連総会で、11月5日が「世界津波の日」として定められました。これは、日本を含め142の国が、津波の脅威と対策について理解と関心を深めることを目的に共同提案し、全会一致で採択されたものです。

今後は、11月5日に合わせて、津波防災の啓発活動が世界的に展開され、津波による犠牲者がなくなることが期待されています。

どうして、11月5日なの?

この日は、江戸時代の後期、1854年(安政元年)11月5日、安政南海地震による津波が和歌山県をおそった際に、濱口梧陵が稲むらに火をつけ、津波から逃げ遅れた村人を高台に導いて、多くの命を救ったという「稲むらの火」の故事にちなんでいます。

11月5日は
津波防災の日

和歌山県教育委員会

「稲むらの火」の主人公 濱口梧陵の偉業



濱口 梧陵

ここが
すごい!!

1

人命救助

安政南海地震による津波に見舞われた11月5日、濱口梧陵は広村（現在の和歌山県有田郡広川町）で貴重な稲むら*（稲束を重ねたもの）に火をつけて、暗闇の中で逃げ遅れている人々を高台に導き、多くの命を救いました。

※当時、稲むらのわらは燃料、飼料、工芸品、生活用具の原料として利用されていた。

ここが
すごい!!

2

地域の復興活動

津波による壊滅的な被害を受けた広村の村人のために、米・衣服等の調達や救済小屋の建築を行いました。それでも離村を申し出る者が次々と出てきました。村の存続を願った梧陵は、防災と村人救済のため、堤防造りという大事業に乗り出しました。村の豪商とともに出資し、老若男女を問わず、広村堤防造りに参加した者には日当を与えました。さらには、新たに建てた住居、農具や漁具を貸し与え、村人の暮らしを支えることで、村からの人口流出を防止しました。

ここが
すごい!!

3

将来の
防災能力
を高める

約4年にわたる工事により完成した広村堤防は、全長約600m、高さ約5mとなり、石垣形式の盛り土堤防の中では世界でも初めてのものとなりました。梧陵の指示により、堤防に沿って植えられた数千本の松の木には、堤防を強固にするだけでなく、松林が津波の勢いを弱くするという減災対策の意味が込められていました。

実際、堤防完成から88年後の1946年（昭和21年）に発生した昭和南海地震では、広村には高さ4mの津波が押し寄せましたが、堤防によって村の大部分が浸水被害を受けることはありませんでした。「百年後に大津波が来ても村を守る堤防を」という濱口梧陵の切なる願いは、この時、実を結んだのです。



上空からの広村堤防（現在の様子）



広村堤防

濱口梧陵という人は？ ●出典：稲むらの火のひみつ — 11月5日は「世界津波の日」（学研プラス）

江戸時代	1820年	文政3	6月15日、紀州広村（今の和歌山県有田郡広川町）に生まれる。	1才
	1831年	天保2	本家の養子となり銚子（千葉県銚子市）へ。以後、江戸と紀州を行き来する。	12才
	1852年	嘉永5	紀州に帰り、若者が剣術や勉強をする学びの場（のちの耐久社）を開く。	33才
	1853年	嘉永6	本家・醤油屋（ヤマサ醤油）の当主となり、7代目儀兵衛を名乗る。	34才
	1854年	安政元	広村を津波が襲う。広村に戻っていた梧陵が稲むらの火で村人を救う。	35才
	1855年	安政2	広村堤防の工事が始まる。約4年の工事で、長さ約600m、高さ約5mの堤防が完成。	36才
明治時代	1859年	安政6	火事で燃えた江戸の種痘館（しゅとうかん）を新しくつくるための寄付をする。種痘館は今の東京大学医学部のもととなった。	40才
	1870年	明治3	醤油屋を8代目にゆずり、梧陵と名乗る。	51才
	1871年	明治4	駅通頭（えきていのかみ）＜日本初の郵政を担当する大臣＞になる。	52才
	1879年	明治12	初代の和歌山県議会議長になる。	60才
	1884年	明治17	横浜から船でアメリカへ。外国を自分の目で見るのが長年の夢だった。	65才
	1885年	明治18	旅先のアメリカ・ニューヨークで亡くなる。葬式が広村で行われ、4000人も人が集まった。	66才

「稲むらの火の館」

濱口梧陵の精神や復興への取組を後世に伝えるとともに、津波防災の意識を高めるための施設として、2007年（平成19年）4月に和歌山県有田郡広川町に建設されました。

濱口梧陵記念館

梧陵ゆかりの品々を展示し、偉大な功績とその生涯を紹介しています。



外観

津波防災教育センター

3D映像や津波実験装置により、津波について学習することができます。



3D津波映像シアター



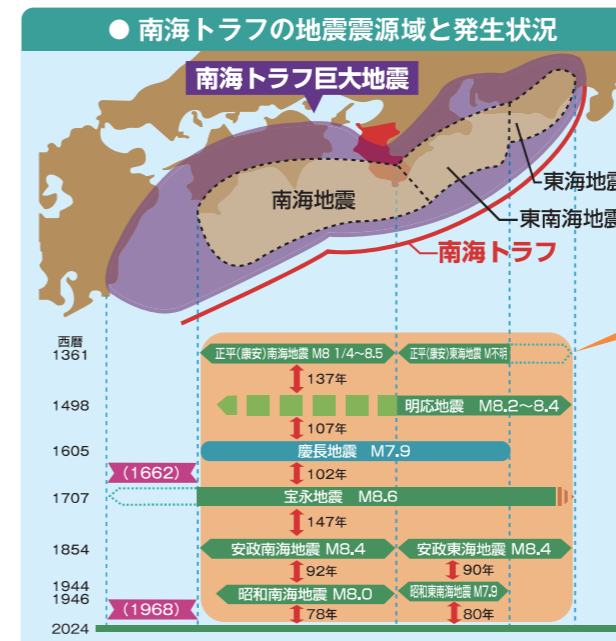
津波シミュレーション

必ずやってくる! 地震・津波に備えよう

【南海トラフで発生する地震】

想定地震	どんな地震？
東海・東南海・南海3連動地震 ●マグニチュード 8.7	南海トラフ沿いの3つの領域（東海・東南海・南海）においては、約90年から150年周期で繰り返し津波をともなう地震が起きてきた。3つの地震が同時に起こることを3連動といい、特に大きな被害が予想される。
南海トラフ巨大地震 ●マグニチュード 9.1	東海・東南海・南海地震の震源域より、さらに広域（日向灘を含む）の震源域で地震が連動した場合の、最大クラスの地震のこと。実際に発生したことを示す記録は見つかっておらず、発生頻度は極めて低いが、仮に発生すれば極めて甚大な被害が予想される。

※マグニチュード（Mと表記）が1大きくなると地震エネルギーは約32倍、2大きくなると約1000倍となる。



東海・東南海・南海地震は繰り返し発生している

●南海トラフの地震長期評価

令和6年1月現在（地震調査研究推進本部発表）

地震規模	M8~9クラス
30年以内の発生確率	70%~80%

南海トラフ巨大地震

最大クラス M9.1 は…

- 過去数千年間に発生したことを示す記録は見つかっていない。
- 繰り返し起きている大地震（南海地震等）に比べ、発生頻度は一桁以上低いと考えられる。

- 確実な震源域
- 確実視されている震源域
- 可能性のある震源域
- 説がある震源域
- 津波地震の可能性が高い地震
- 日向灘のプレート間地震（M7クラス）

津波避難3原則

津波警報が発表されたら、迅速に高台など安全な避難場所へ避難しましょう!!

津波避難3原則

- 1 想定にとらわれない
- 2 最善を尽くせ
- 3 率先避難者になれ



片田敏孝 東京大学大学院情報学環 特任教授 監修

緊急地震速報の活用

緊急地震速報とは、地震発生直後に震源に近い観測点でとらえた地震波形から地震の規模や震度等を解析し、強い揺れが迫っていることを伝える地震情報です。

緊急地震速報から、強い揺れが到達するまでの時間は長くても数十秒ですが、この間に心構えや緊急対応をすれば、被害の軽減を図ることができると考えられています。

※緊急地震速報は、テレビやラジオ等の他、専用の受信装置を設置して入手することができます。

※地震発生場所の近くでは速報が間に合わないこともあります。

緊急地震速報のしくみ

